

VIVID LETTER

NO. 1 2008/9/1

「ヴィヴィレター」

創刊号

応援メッセージ ■ 京極高宣さん	1
VIVID 第一回総会開催	2
活動報告 ■ VIVID 基礎研修会開催	3
VIVID BOOK シリーズ創刊	4
VIVID 事業カレンダー	5
理事コラム ■ 大屋敷剛康	5
創刊にあたって ■ 池田敦子	6

特定非営利活動法人 VIVID (ヴィヴィ)
東京都新宿区歌舞伎町 2-19-13 ASK ビル 601
TEL&FAX 03-5849-4831
Eメール hbd-vivid@coast.ocn.ne.jp
HP <http://www.geocities.jp/npovivid/>

“VIVID”は高次脳機能障害者の社会参加を支援する特定非営利活動法人です。

応援メッセージ

「活気あふれた (vivid) NPO 活動に期待する」



中央障害者施策推進協議会
会長 京極高宣

(国立社会保障・人口問題研究所所長)

現在、マスコミ等でも法や制度の谷間にある社会問題が数多くあることが指摘されている。その一つに、高次脳機能障害者の問題がある。ある日、突然襲った交通事故や急性疾患で脳に起こった異変によって引き起こされた高次脳機能障害は、はた目から見ると、普通の人に

みえるかもしれないが、大変困難な生活問題をかかえている。そうした人々への医療や福祉サイドからの支援も決して十分ではないのである。

今回、日本社会事業大学専門職大学院の第二期生の卒業生が中心になって立ち上げた NPO 法人 VIVID (ヴィヴィ) は、高次脳機能障害を持つ人々が、人生をあきらめず、希望をもつてもう一度人生のスタートラインに立つことができるような支援を一緒につくり出していく自主的組織であり、その歴史的な意義と役割はきわめて大きいように思われる。

私は、日本の儒学者・佐藤一斎の言葉で、「事已(や)むことを得ざるに動かば、動くとも亦(また)悔(くい)无(な)からん(『言志後録』第196条 *意味は理事コラムにて解説)を好んで使うが、まさに「VIVID」は、動くとも亦悔无からん、の覇気で、生き生きとした文字通り vivid な活動を展開されることを期待している。

私も賛助会員として、陰ながら応援させていただく次第である。

「内幸町から愛をこめて」

(注: 内幸町は国立社会保障・人口問題研究所が所在するところである)

VIVID 第一回総会 開催



VIVID が NPO として活動を開始して第 1 回目の総会を、5 月 24 日（土）に、無事開催することが出来ました。当日は、正会員 25 名（開催日現在）の内、10 名の方にご出席（その他委任状 11 名）いただき、2007 年度の事業活動報告・決算報告、2008 年度事業活動計画・予算、役員の変更（新たに大屋敷剛康氏を理事に新任）に関する議案、すべてが承認されました。

総会で承認された議案の内、2007 年度の活動報告と、2008 年度の事業計画の概略は次の通りです。

2007 年度事業活動報告

□ 総括

高次脳機能障害への支援を行う NPO 法人を立ち上げるために、2006 年 3 月に準備会を立ち上げていましたが、2007 年 3 月 3 日に設立総会を開催、7 月 4 日東京都から認証を得て、7 月 20 日に登記を済ませて、NPO 法人 VIVID（ヴィヴィ）が正式に発足しました。

毎月 1 回の企画会議を中心に、そこでの会議メンバーの合意を得ながら、順次、出来る事業から事業企画の実施に取り掛かってきました。しかし、事業計画に掲げた事業の推進体制が整わず、実施できない事業が積み残しとなりました。そのため、未執行の支出の発生も見込まれ、普及啓発事業の一環として、新しく VIVID・BOOK シリーズの発行準備を行い、新事業の芽だしにつなげることが出来ました。

また、NPO 法人東京高次脳機能障害協議会（TKK）や、慈恵医科大学の橋本圭司先生達が行う NPO 法人日本脳外傷後遺症リハビリテーション支援ユニオン（リハビリプログラム「オレンジクラブ」）を実施する団体等の各種関連団体とのネットワークを積極的に作りました。

□ 活動報告

- 「高次脳機能障害者の在宅生活実態調査」のプレ調査の実施
TKK の協力を得て当事者（家族）416 名（内 144 名から回答入手）に対してアンケート調査を実施しました。
- NPO 法人 VIVID（ヴィヴィ）設立記念セミナー開催
2007 年 12 月 16 日（日）
東京都 西新宿 モノリスビル
- 高次脳機能障害者体験手記の出版準備

2008 年度事業活動計画

□ 活動方針

2007 年度の活動を踏まえて、2008 年度は運営実態に沿った事業計画に見直す必要が生じています。あわせて、大口の寄付が 2008 年度で終了することを見込んで、2009 年度の事業収支の見通しを視野に入れた事業計画が必要となっています。そのため、今年度は、実現可能な事業と予算を検討し、事業計画を策定しました。

事業展開の環境としては、2008 年度は前年度からの継続事業である高次脳機能障害者の在宅生活実態調査等が具体的に始まり、新規事業に取り組む年になります。2007 年 12 月の設立記念セミナー実施後新たに会員が増え、様々な情報も寄せられています。2008 年度を、「事業を軌道に乗せ、成果を世に示す 1 年」として位置付け、積極的に活動していきたいと思えます。

□ 事業活動計画

- 在宅生活に関する調査研究事業
2007 年度に実施したプレ調査をもとに本年度は本調査に入るとともに、医師、看護師等専門職をメンバーとしたケア研究会を開催。
- 普及啓発事業
福祉職、医療職等専門職向けの研修会と、当事者、家族、一般市民対象のセミナーを開催。
VIVID BOOK シリーズ 1 の出版。
- ミニデイサービス提供事業
当事者、家族の要望が多い、家庭以外の居場所としてのミニデイサービスの立上げを目指しての調査研究とトライアル。
- フルーツバスケット研究会事業
NPO 法人の資金調達に関する研究会の立上げ。
- 相談事業

活動報告 : VIVID 基礎研修会 開催

VIVID では、社会福祉法人有朋舎と共催、府中市、NPO 法人東京高次脳機能障害協議会（TKK）の後援で、『高次脳機能障害のある人への在宅支援』のテーマで専門職対象の研修を7月13日と27日、Part 1、Part 2として、2回にわたり開催しました。



《PART 1の会場風景》

Part 1は、『高次脳機能障害者の理解と対応』というテーマで、早稲田大学、教育・総合科学学術院教授の坂爪一幸氏（医学博士、臨床心理士、言語聴覚士、臨床発達心理士）を講師に迎え、7月13日（日）いずみホール（国分寺市）にて行いました。

研修の前半は「高次脳機能障害とは」というサブテーマで、高次脳機能障害の様々な症状について、実際に当事者が書いた絵や図などを示しながら説明していただきました。後半は「高次脳機能障害者の示しやすい心理反応と対応の基本」というサブテーマで、高次脳機能障害者が、なぜ不適応行動をおこすのかについて、心理（感情）反応と行動の関係から説明いただき、理解しやすい働きかけや応答的な働きかけなどについてお話しいただきました。坂爪先生の講演から、高次脳機能障害者の抱える不安な気持ちを理解することが支援の基本であることを痛感しました。

Part 2は、『高次脳機能障害者支援について』というテーマで、東京都心身障害者福祉センター地域支援課高次脳機能障害者支援担当係長の、田中眞知子氏を講師に迎え、7月27日（日）スクエア21女性センター（府中市）で行いました。

研修の前半は田中氏より「支援拠点からの報告～東京都における取組み、福祉関係の制度等について」というサブテーマで、東京都における高次脳機能障害者支援の展開と、支援拠点としての東京都心身障害者福祉センタ

一の機能、そして高次脳機能障害に関する福祉制度についてお話いただきました。後半は「体験報告」として家族の立場、当事者の立場からお一人ずつ体験をお話しいただきました。

家族の立場からは、専門職へ当事者が望む支援を続けられる環境づくりの充実を訴えると同時に、当事者を支える家族へのサポートも構築して欲しいとお話をいただきました。また、当事者の立場からは、「リハビリ」が自分自身の心身にどのような影響を与えているかを、実際に行っていることを踏まえながらお話いただきました。田中さんの講演からは、高次脳機能障害をとりまく制度の現状や環境を学ぶことができました。更に家族や当事者から直接話を伺うことにより、「支援の在り方」を考える機会となりました。



《PART 2の会場風景》

今回の研修は、リラックスした状態で受講していただき、日頃の溜まったストレスの解消に繋がればというスタッフの願いから、パート1・2を通じてハーブティとアロマの香りのサービスを提供しました。更に、現在の心身状態を自己覚知するツールとして Part 1では心身状態チェック表を作成しました。また、Part 2では、夏を乗り切るためのグッズとしてオススメのアロマオイルを紹介しました。

参加いただいた方からは、研修を通じて「高次脳機能障害についての基礎的な知識が理解できた」という感想とともに、「具体的な支援の方法や事例等を詳しく知りたい」という意見を多数いただきました。

今回の参加者の皆さんの感想やご意見を参考に、今後とも VIVID では各種研修会を開催する予定にしています。

（研修事業担当 増田美登 星野旬 中野裕美）

2008年4月30日、VIVID設立にお寄せいただいたご厚志・ご寄付により“VIVID BOOKシリーズ”の第一弾として、高崎陽子理事の実体験をもとにした「あっち側から見たこっち側～脳卒中実習レポート～」を出版しました。



定価1,000円(税込)

目次

- ◇ あっち側から見たこっち側
脳卒中実習レポート — 高崎 陽子
- ◇ NPO 法人 VIVID 設立記念セミナー
高次脳機能障害への支援をつくる
「はじめの一步・・・、ともにつくる地域支援」
・基調講演
東京慈恵医科大学付属病院
リハビリテーション医 橋本 圭司
・ミニパネルディスカッション
- ◇ あとがき
橋本 圭司

推薦の言葉

日本社会事業大学専門職大学院
福祉マネジメント研究科研究科長
教授 今井 幸充

2006年2月、日本社会事業大学専門職大学院2期生の著者高崎陽子さんは、卒業レポート発表会の夜、脳出血で倒れた。

一夜にして障害者になった高崎さんの闘病記録は、当事者の声であり、またケアマネージャーである高崎さんの自己体験から発せられた福祉を学ぶ者へのメッセージでもある。

筆者から一言



VIVID 理事
高崎 陽子

『あっち側から見たこっち側』は当事者・クライアント側から見た 援助者達側という意味です。

当初からのタイトル「脳卒中実習レポート」は、大学院卒業間近に持病により脳出血で倒れた私が、福祉の現場で援助職として働きはじめた同級生にむけて心配をかけたお詫びをかねた突撃体験報告でした。「ねえ、ねえ、当事者になってみたら、こんな風だったよ。教えてあげる。」こんなノリの。

だけど、一番初めは、「私ってまだちゃんとしてるよねっ？」という承認を得たくて書き始めたのかもしれませんが。そして、この現在の嘘みたいな自分の事実が人生の中の「実習」という過程なのだと思いたかったと記憶しています。

半身麻痺のろくに口もまわらない、頭もぼんやりしている私が、はじめ、ノートを左手で押さえることも出来ずに書いた文書を見舞いに来てくれた友人達が笑いながら読んでくれたのが、本当に嬉しく「私は大丈夫」と実感できました。そして、退院後も実習生のような鋭い目(笑)で観察したことを思い出し文章に書き綴った事が、私の頭のリハビリにもなったと思います。

今振り返ってみると、文字を読み書きする能力が損なわれなかった事にとても感謝しています。

VIVID BOOK シリーズのご注文、お問い合わせは、VIVID 事務局までご連絡下さい (TEL 03-5849-4831)。

VIVID BOOK シリーズは、突然の事故や病気により誰にでも起こり得る 高次脳機能障害の理解を広め、この障害の社会的不利を軽減し、少しでも障害からの回復に役立てていただけるような出版を今後とも目指しています。

VIVID 事業カレンダー

活動実績

4月 12日 23回企画会議開催
30日 VIVID BOOK シリーズ創刊

5月 ミニデイサービス事業の立ち上げに向けて、府中市の「集いの家」で現場実習を行いました。
10日 24回企画会議開催
24日 第1回総会開催

6月 新宿区への協働事業提案に向けて、新宿区内の高次脳機能障害者に関連する各種施設（保健所、地域保健センター、障害者福祉センター、障害者施設等）を訪問しました。
14日 25回企画会議
30日 新宿区協働事業提案書提出
来年度新宿区が区内の非営利活動法人と実施する協働事業提案制度に「高次脳機能障害者生活サポート事業（相談事業、居場所作り事業、研修事業）」の提案を行いました。選考結果は、9月末に分かります。

7月 5日 26回企画会議開催
6日 NPO 法人東京高次脳機能障害者協議会（TKK）シンポジウム参加
13日 VIVID 基礎研修 PART1 開催
「高次脳機能障害者の理解と対応」
27日 VIVID 基礎研修 PART2 開催
「高次脳機能障害者支援について」

8月 23日 27回企画会議開催
24日 当事者・家族との意見交換会開催
ミニデイサービス事業の立ち上げに向けて、当事者の方、家族の方から、プログラムの内容、期待すること等をざっくばらんにお聞きしました。

これからの予定

9月 1日 VIVID LETTER 創刊
9日 新宿区協働事業提案
公開プレゼンテーション

10月 在宅生活実態調査開始（予定）

11月 ミニデイサービス開催（予定）

1月 ミニデイサービス開催（予定）

3月 ミニデイサービス開催（予定）

VIVID では、9月以降、高次脳機能障害者の日中の居場所としてのミニデイサービスの立上げに向けて本格的に準備を開始し、11月、1月、3月と今年度中に3回の開催を予定しています。
参加希望の方は、VIVID 事務局までご連絡下さい。
(TEL 03-5849-4831)

理事 コラム

当 NPO 法人の中核をなす日本社会事業大学専門職大学院二期生は、前学長の京極高宣先生から入学の許しを得たものの、直後に退任されたため、講義を拝聴する機会は数えるほどしかなかった。それでも、しばらくして「日本社会事業大学学長としての十年」という副題のついた『動くとも亦悔无からん』（中央法規出版）を上梓されたので、書物を通じての“講義”は継続していただくことができた。日本ソーシャルワーカーの歴史や福祉専門職については、この書から多くを学んだし、「福祉学徒へのメッセージ」として収録された十年間にわたる入学式・卒業式の式辞は、何度読み返しても、その都度

新たな学びをもたらしてくれたものだ。そして、先生から頂戴した応援メッセージに「動くとも亦悔无からん」の言葉を見つけたときは、講義再開のチャイムが聞こえてきたような、そんな気がして感慨無量だった。肝に銘ずべきこの言葉の重みについて、先生のご著書から引用しつつ噛みしめたい。
「リーダーたる者は、やむを得ない事情があったら断固として事を為すべきで、動いた後に後悔することはない。逆に、改革すべき時期でないのに、軽率に動いて、一時しのぎをすれば、後になって後悔することになる。」
(大屋敷 剛康)

創刊にあたって

私たち NPO 法人 VIVID(ヴイヴィッド)は、日本社会事業大学専門職大学院 2 期生をコアに 10 人が集まり設立一周年をこの 7 月 20 日に迎えたところです。

<高次脳機能障害とともに>を理念に当事者や家族の支援を事業の中心におき、2007 年度は、10 月「高次脳機能障害者の在宅生活調査のためのプレ調査」を東京高次脳機能障害協議会(TKK)の協力を得て実施し、12 月に設立記念セミナー「はじめの 1 歩…ともしつくる地域事業」を開催しました。2008 年度に入り、4 月に VIVID BOOK シリーズ 1 を刊行し理事の高崎陽子の「あっち側から見たこっち側～脳卒中実習レポート～」を上梓しました。また、7 月には、社会福祉法人有朋舎との共催、TKK と府中市の後援を得て、高次脳機能障害者支援のための研修(基礎編)パート 1、パート 2 の 2 回を開催することが出来ました。

現在は新宿区協働提案事業に応募し、居場所づくりを中心に相談と普及啓発を 3 本柱とする「高次脳機能障害者サポート事業」を提案中です。

地域に高次脳機能障害者の居場所づくりを目指す過程に、社会的な問題として、中途障害者は法の狭間であり多くの制限の中でのサービスは個人の自立を支える内容になっていないことや、特に脳損傷による後遺症のため身体以外にも多くの障害が現れる高次脳機能障害についての行政的判定基準が示されたのは 2006 年であ

り、現在も十分周知されたとは言い難い現状があります。行政の取り組みも先駆的な自治体を除いて、多くは今後方針が出される時期にあり、『障害者自立支援法』で器質性精神障害の分野に位置づけられた高次脳機能障害に対応する適切なサービスは、待っていても手に入らない状況にあります。三位一体改革の流れは、市民参加型の行政サービスを生み出そうとしています。深い思いと高い志があっても家族会や NPO だけで実現できる事業には限界があり、当事者や家族のニーズの高いサービスを身近なところに創り出すことをミッションとする NPO と、一人ひとりの生活を継続的に支える公共サービスをミッションとする行政のコラボレーションを実現させたいと考えて積極的に応募しました。

VIVID の活動は、高次脳機能障害者とともに歩みながら社会的な自立の道を開いていく活動です。VIVID LETTER は、VIVID の活動をお知らせすると同時に、読者の皆様からお知恵をいただき、解決への糸口を繋いでいく情報紙にしていきたいと思えます。ご賛同いただける方々のご参加を心より、お待ちしております。最後に、京極先生はじめ先輩諸氏のエールに感謝を申し上げ、創刊への想いといたします。

2008 年 8 月
代表理事 池田敦子

VIVID からのお願い

VIVID では、私たちの活動趣旨に賛同し、会員、賛助会員、寄付者になっていただける方、および、ボランティアとして我々の活動に参加していただける方を募集しています。

会員：年会費 個人 5000 円 団体 10000 円
賛助会員：年会費 個人 5000 円 団体 10000 円
寄付：金額は問いません

ご関心のある方は、VIVID 事務局までご連絡下さい
(TEL 03-5849-4831)。

入会申込書をお送りします。

編集後記

■ 福祉の勉強を始めた頃、聞き慣れない用語にずい分戸惑いました。今では、「業界用語」として日常的に使っていますが、誰にでも理解でき、解りやすい言葉はとても大切です。編集にあたって改めてそんなことに思いを馳せました。新しく生まれたこのレターが様々な言葉を紡ぎながら、多くの方々の心に響くことを願っています。(あ)

■ 先日、NPO の継続的な事業運営に欠かせない資金開拓(ファンディング)の研修会に参加してきました。そこで学んだことは、関係者との「コミュニケーション」の重要性。この“ヴィヴィレター”が、ヴィヴィと皆さんとを結ぶ「コミュニケーション」のツールになればと思っています。(さ)